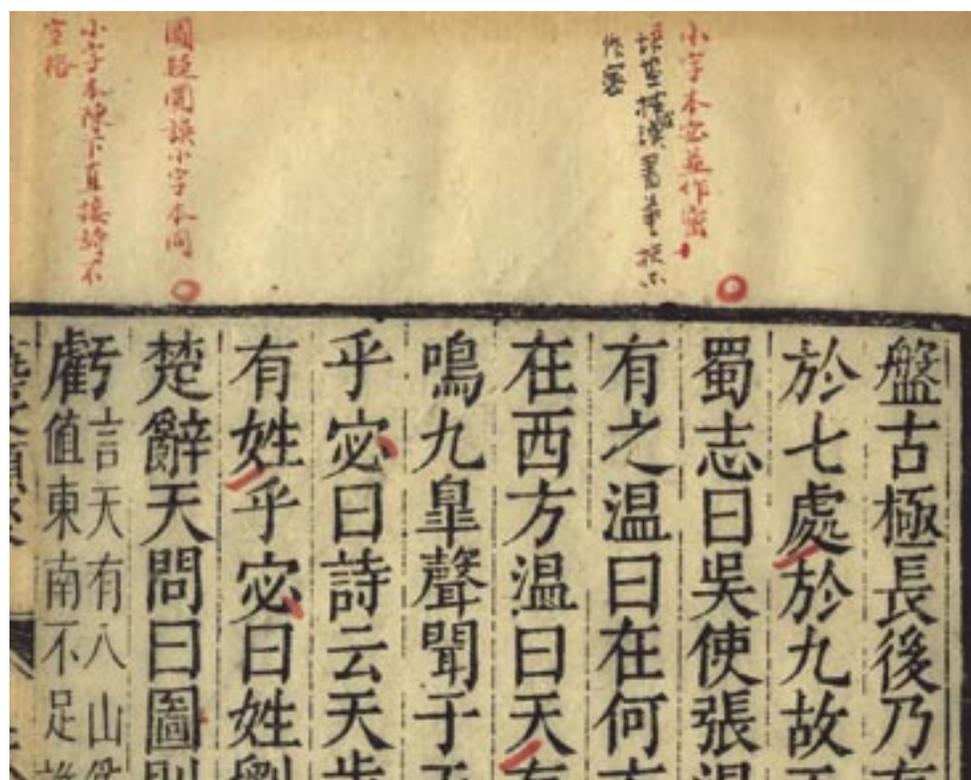


漢字と情報

No. 6
2003・3



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 平成14年度漢籍担当職員講習会 開講挨拶
- 漢籍担当職員講習会プログラムの改訂について
- 漢籍レコードエディタ
- 古書の表紙の裏側
- 人文研アーカイブス（6）『藝文類聚』

平成14年度漢籍担当職員 講習会 開講挨拶

朝倉徳浩

平成14年度漢籍担当職員講習会の開催に当たり、御挨拶申し上げます。皆様方には、日々、図書館活動にご尽力賜り大変ありがとうございます。この場をお借りして御礼申し上げます。

我が国は、古来、非常に多くのことを中国から学んできました。これらの知識は、主に漢籍の漢文訓読という独自の手法により、その内容を理解し、摂取したものであり、日本文化の基礎が漢籍、中国にあるといっても過言ではありません。漢籍は、日本の文化、文明を知るための基本的な重要資料であるとともに、現在においても、東洋、少し広い地域を対象にしてアジアの研究等において重要な資料であります。このような貴重な資料を整理・保存して後世に伝え、学術研究を推進するために、漢籍の整理等の業務に携わる皆さんの役割は大きなものがあります。

このことを踏まえ、文部科学省としましては、漢字情報研究センターと協力して本講習会を開催し、漢籍の取り扱いに関する知識と技術を普及することにより、学術資料としての漢籍の有効な利用体制の整備を図っているところです。

さて、本講習会は、これまで、「漢籍担当職員講習会（初級）」と「漢籍担当職員講習会（中級）」の講習会を隔年で交互に開催してきましたが、毎年開催してきた「漢籍担当職員講習会（漢籍電算処理）」と統合することにより、新しい「初級」と「中級」の講習会を同時に開催することとしました。このことにより、「漢籍電算処理」の要素を「初級」、「中級」に盛り込み、講義内容にメリハリをきかせたほか、全体的に講義の時間を拡大するなど充実したものになっています。

また、みなさんが受講される、この「中級」におきましては、従来は講義中心でしたが、併せて電算処理による目録作成の実習を取り入れ、知識

の習得を効果的に行えるよう配慮しています。

目録情報は、学術研究の最も基本的な基盤となるものであり、その情報を有効に活用するためには、電算化し、各図書館内の利用者はもとより、対外的にも情報提供することが重要であると考えます。このため、各図書館において漢籍の目録を作成するに当たっては、この講習会で修得した知識と技術をもとに、電算処理で行っていただけるよう積極的な取組を期待いたします。

本講習会は、各分野で最新の知識、経験をお持ちの先生方に講義をお願いしています。また、国公私立大学図書館に加えて公共図書館を始めとする様々な館種の職員の方々が参加していらっしゃいますので、各講義の内容を十分理解していただくことは基より、講義の合間に互いの情報を交換していただくなどして、図書館の規模や館種を越えた人のつながりを確立して、今後の図書館活動に役立てていただければ幸いです。

最後になりますが、本講習会の開催に当たり、多大なる御協力をいただきました京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センターの方々を始めとする皆様には、厚く御礼を申し上げますとともに講習会が実り多いものとなりますよう心から祈念いたしまして開講の挨拶といたします。

（文部科学省情報課学術整備基盤室室長）

※ 平成14年11月11日(月)に実施した漢籍担当職員講習会（中級）初日での講演記録である。





漢籍担当職員講習会プログラムの改訂について

井波陵一

文部科学省と本センターとの共催による漢籍担当職員講習会は、「初級（もしくは中級）」および「漢籍電算処理」の名目で年2回実施されており、平成13年度現在、通算44回に達している。「初級（もしくは中級）」の講習会は約30年、「漢籍電算処理」の講習会も約15年の歴史を数える。毎年、募集定員を上回る申し込みがあり、各図書館等が今日もなお漢籍整理の必要性を強く認識していることが窺える。

「初級（もしくは中級）」においては、これまでまったくパソコンを利用してこなかった。漢籍整理の伝統的なマニュアルに従って、きちんとカードに記入できることを目標としてきたため、特段の必要性を感じなかったことによる。一方、「漢籍電算処理」においては、たとえば「Web ページ作成」、「TCP/IP とインターネット」のように、コンピュータを扱う際の基本的知識を身につけるためのものが含まれている。

しかし図書館におけるパソコン利用が一般化、高度化し、また外字処理が大きなネックとなっていた漢籍整理についても、文字コードの問題がほぼ解決された現在、講習会を取り巻く状況は大きく変わったと言わざるを得ない。

本センターが東洋学文献センターから漢字情報研究センターに改組したのは、漢字文献のデジタル化が急務とされる現状に適切に対応し、漢字の情報処理に関する専門的研究を本格化させるためであったが、その社会的還元の一環として、今年度より、講習会のプログラムも一新することにした。最も大きな変更点は、パソコンの利用を前提とした漢籍整理法（具体的には、カードに記入するのと同じ要領で入力する編集画面の利用）を導入したことである。これにより、従来の2分野3種類の講習会を、新たな「初級」「中級」へ発展的に統合する。

「初級」では、「漢籍目録が読める」、「従来のカード方式と同じ要領でパソコン入力ができる」ことを目標としており、講義・実習のおもな内容と狙いは以下の通りである。

1. 漢籍について（歴史や形態など、漢籍に関する基本的知識を身につける）
2. 漢籍目録の構造——漢籍整理の基礎（漢籍目録の構造を理解し、記載内容の意味を把握する）
3. 目録検索とデータベース検索（目録検索とデータベース検索の共通点と相違点を理解する）
4. カードの取り方——漢籍整理の実践（本センターが編集した「目録作成要領」の内容を理解し、実習に備える）
5. 工具書について（漢籍整理に必要な各種の辞書に関する知識を深める）
6. 漢籍目録カード作成実習（「目録作成要領」に沿って、初歩的な実習を行う）
7. コンピュータと漢籍（漢籍のデジタル処理に関する基本的知識を身につける）
8. 漢籍データ入力実習（本センターが作成した「入力編集画面」に従って入力実習を行う）
9. 漢籍データベースについて（全国漢籍データベースの内容と意義について理解を深める）
10. NACSIS-CAT と漢籍データベース（NACSIS-CAT と漢籍データベースの関係を理解する）

「中級」では「漢籍に関する知識を高める」ことを目標としており、講義・実習のおもな内容と狙いは以下の通りである。

1. 中国目録学史(1)「時代情況と出版傾向」(出版の歴史について時代的特徴を理解する)
2. 中国目録学史(2)「中国の地方志」(一般の漢籍とは異なる扱い方をする地方志の整理法を理解する)
3. 中国目録学史(3)「和刻本漢籍」(日本で刊行された、いわゆる和刻本漢籍の特色を理解する)
4. 叢書(漢籍の分類や編纂において最も特色ある叢書の歴史とその整理法を理解する)

5. 実習(初級より難度の高いテキストを使用)
6. 『東洋学文献類目』(本センターが毎年発行する『東洋学文献類目』を例に、東洋学、とりわけ中国学に関する研究情報提供の現状を理解する)
7. 現代中国書(近現代中国における印刷・出版の歴史や現状を理解する)

「古さ」(伝統ある漢籍整理)と「新しさ」(パソコンによる漢籍整理)がともに身につく講習会を実施して、受講生のニーズに応えたいと考えている。(センター教授)



《編集画面》

(図①)

漢籍レコードエディタ

梶浦 晋

本センターでは、漢籍目録のデータベース作成のためのフリーソフトウェア《漢籍レコードエディタ》(富士通製)を提供している。このソフトは、WINDOWS2000以上のOSで動き、書名・撰者・鈔刻などを、画面の項目にしたがって入力すると、全国漢籍データベース協議会で運用している漢籍データベースのフォーマットによる目録データベースが作成できる。冊子目録やカード目録からの入力や、カード作成を省略して直接データベースを作成することも可能である。

従来のカード目録や冊子目録の情報を、《漢籍レコードエディタ》を用いて入力し、そのデータを全国漢籍データベースに反映させると、書名、撰者などから検索することができる。

図①は本所所蔵の嘉慶道光間刊本『江氏音學十書』の目録データの編集を完了した画面である。『江氏音學十書』は『詩經韵讀』『羣經韵讀』などがおさめられている叢刻で、図①の上は総目データの編集画面、下は子目データの編集画面の一部である。編集がおわると編集画面上方の横長のウインドウに簡略な一覧も表示される。

図②は、全国漢籍データベースで『江氏音學十

書』を検索した画面であるが、左は総目を表示したもので、子目すべてが同時に表示される。この画面の子目をクリックすると、右のように個々の子目のデータが表示される。また、子目画面左上の総目書名をクリックすると、叢刻全体の画面にジャンプする。

今後、パソコンによる目録編纂や所蔵情報等の検索が主流となるのは時代の趨勢であろう。全国漢籍データベースは、冊子やカードの目録にくらべ、複数の機関の所蔵が確認できるほか、書名や撰者名の一部からでも検索できるなど、冊子やカードではできなかった検索が可能で、格段に便利にはなっている。しかし蔵書全体を通覧することなど、冊子目録に及ばないところもある。今後、冊子目録の利点を取り込むなどの改良も必要とだろう。

漢籍担当職員講習会(初級・中級)では、このソフトを使用して、パソコンによる目録作成実習も行っている。

また、すでにこのソフトを使用して、独自のデータを作成している大学・研究室もある。

ソフトのダウンロードや全国漢籍データベースについては、協議会のホームページ(<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kansekiyogikai/>)参照。(センター助手)



《検索結果》

(図②)

古書の表紙の裏側

古勝隆一

京大附属図書館の貴重書閲覧室。机の上に古書が載っている。『春秋経伝集解』、存卷十一—三十、三帙二十冊。現在の請求番号は「清家、1—65、シ7貴」。

第十一冊目を目の前に置き、雲母引きの表紙をめくる。おもて表紙の裏に、何やら反故が貼り付けてある。片仮名混じりで書かれたそれは、私にはなじみのある、『莊子』逍遙遊篇の解釈であった。さらに第十一冊のうら表紙、第十二冊のおもて表紙とうら表紙、第十三冊のうら表紙にも、同様の紙が貼ってある。

紛れもなく、清原宣賢（一四七五—一五五〇）の手になる、『莊子』の抄物。室町時代を代表するこの大学者がみずから抄写した『莊子抄』を、私はずっと求めていたような気がする。

たしかに『続抄物資料集成』第七卷（清文堂、昭和五六年）には、宣賢の曾孫、清原国賢（一五四四—一六一四）が写した『莊子抄』が影印されているし、同、第十卷（平成四年）に収める土井洋一氏の解説においても、同書が宣賢の抄物であるらしいことは推測されていた。しかし、私はそれに満足することなく、宣賢自筆の『莊子抄』を確かめておきたかったのだ。宣賢自身が講じ、かつ書いた抄物が多数伝存している状況からして、宣賢の『莊子抄』もどこかにあるのではないかと。

ようやくその確認を遂げた現在、『莊子抄』に対するささやかな興味が増したのはもちろんである。いま、喜びを味わいながら読み進めている。

古文献に接する者が、しばしば経験するであろうこのような小発見の功を、ここで誇りたいのではない。そうではなく、書物を手にすることができる贅沢に、ただ感謝したいのである。

我が国でかつて写された古写本を見る機会を得るたびに、私は畏れの念を抱く。このような美し

い知の結晶に、手を触れてよいのだろうか、と。おずおずと表紙をめくり、またある時は巻子を開く。大きく、黒々と書かれた漢字の列なり。書きつけられているのは、かつてはどれほど人を圧倒したかと思われる古典の強いことば。その栄光の余韻は、優れた紙、墨、格式、装訂をともない、私の眼前にある。それをながめ、この豊かな源泉から、己が汲み得るものの小ささを憂うのである。

しかし、何たるさもしさか、この書物の中に面白そうなところはないかと探しはじめる。終いには疲労を感じ、あとはすべて写真に撮ってもらって、後日読めばよいなどという、不心得をおこす。先ほどまでの厳かな気持ちはどこへ消えたのか。

そうではあっても、本を開くときのあの新鮮さは、いつまでも感じ続けるのだと思う。一級の古写本はもちろんであるが、それに限った話ではない。また、研究者としてそうあらねばならないとかいう、心得や自戒でもない。子供が絵本を開くのと同然の喜びをいうにすぎない。

書物の内容についても、同様に、そのような新鮮さと畏れとをいつも感じる。書物の内容の一部や一面を切り取って、資料などと呼ぶことがあるとすれば、その殺風景なことばに抗いこう眩きたい。言は意を尽くさず、書は言を尽くさず、資料は書を尽くさず、と。

話題をもとの『春秋経伝集解』に戻すと、この本は極めて面白い。『春秋経伝集解』と『春秋抄』とを交互に配して一目瞭然ならしめた、便利この上ないものなのである。しかも『経伝集解』の方は、貴重な南北朝刊覆宋本を匡郭に沿って切りつめたものと、宣賢写本との取り合わせという豪華さ。抄物は、宣賢とその息子、業賢（一四九九—一五六六）が共同で書いたもの。二人の仕事のさまを感じさせる。冒頭に述べた『莊子抄』以外にも、『春秋抄』など、宣賢自筆の抄物が表紙の裏張りとして使用されている。そのうちの一部はいまだ正体が知れないが、いずれ調べてみようと思っている。（人文科学研究所助手）

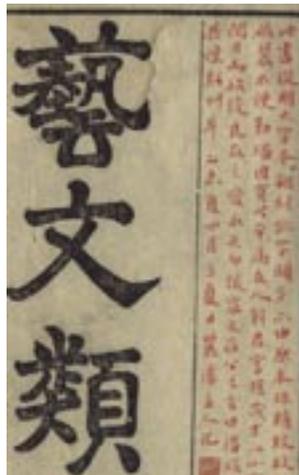
人文研のアーカイブス (6)

藝文類聚 一百卷

唐 歐陽詢 撰

光緒五年華陽宏達堂刊本

梶浦 晉



『藝文類聚』の刊本は、現存するものだけでも十種以上ある。現存の宋刊本は、上海図書館所蔵の残本のみで（1959年中華書局景印本有り）、元刊本は歴代の著録には有るが、現存を聞かない。

明代には盛んに刊刻され、『中國古籍善本書目』には、正徳十年華堅蘭雪堂銅活字印本、嘉靖六年七年胡纘宗陸采刊本、嘉靖九年鄭氏宗文堂刊本、嘉靖二十八年平陽府刊本、萬曆十五年王元貞刊本、明余氏尊古堂刊本、明石渠山房刊本、明尚古堂刊本などが著録されている。流布本の光緒五年華陽宏達堂刊本は萬曆十五年王氏刊本にもとづき刊行したものである。

本所所蔵の刊本『藝文類聚』は三種ある。一は明刊本（14行28字）、一は萬曆十五年白下王氏刊本（10行20字）、もう一は光緒五年宏達堂刊本で、これは二套所蔵している。

ここに紹介するものは光緒五年本の一で、葉德輝の旧蔵で識語がある。葉德輝（1864～1927）、字煥彬、号直山、室名郇園・觀古堂・麗慶など。湖南湘潭の人。光緒十八年進士。小学・目錄版本学に精通し、蔵書家としても知られる。『説文籀文攷證』『書林清話』等、自身の著書のほか、『麗慶叢書』『雙楫景閣叢書』等刊行した書物も多い。

『郇園讀書志』には、『藝文類聚』に関する文章4篇がおさめられている。本書（封面）に記された識語も、「又一部 明達堂書坊本」として収録されているが、一部異なる箇所があるとともに、乙未四月立夏（光緒二十一年）・丙申二月七日（同二十二年）と期日が記されている。

此書從明大字本翻刻訛字頗多由原本非精校故也家藏小字本葉多破裂不便勤繙因買此本屬友人劉君雪樵茂才以小字本校對改定凡四閱月而始竣……（封面識語冒頭部）

此書從明大字本翻刻訛字亦多由原本非精校故也家藏明翻元小字本余甚愛惜不欲時時繙檢……（『郇園讀書志』）

識語にいうように、劉雪樵による、明小字本との校合が全書にわたり朱筆で記されている。

（センター助手）

